

郷土室だより

八丁堀襟記 一四了

安 藤 菊 二

八丁堀の板元

与力が纏って住んでいた茅場町地区である。その広い屋敷内の貸屋も高級で、今まで見て来たように、儒者・医者・画家・書家といった人達が多かった。それも、人名録に載るほどの名家が尠くない。

それに引換えて、同心達の拝領屋敷は地坪も狭かったから、貸屋も小さく、住む人達はもっと庶民的で、きわ立った対照を見せる。そんな庶民の間に人気のあったはやり唄の瓦版屋京屋宗兵衛を中心に、八丁堀の板元について紹介し、八丁堀襟記の最終回としたい。

瓦版以外は「板」の字を用いた。

○瓦版本板元京屋宗兵衛

八丁堀地蔵橋火之見櫓横町には、瓦版本屋の京屋宗兵衛の店があった。

石川巖氏が、昭和初年に入手された瓦版本八種の内に、京屋板の『字餘おぐらいたこぶし』があった。本書を借覧して感興を触発された忍頂寺務氏は、雑誌『書物の趣味』第三冊に「潮来節の文献と『笑本板古猫』という一文を投じ、写真入りで紹介された。

この本は紙数四枚、上下に分れ、上の部に

七章、下の部に六章、十三章を収めたもの、頗るつぎの珍書である。忍頂寺氏によれば、江戸で「いたこぶし」の流行を見たのは文化年間、その流行が経過して、文政年間には「よしこの節」、天保に入って都々逸の流行を変遷したという。写真版で読み取れる「おぐらいたこぶし」の詞章を写すと、

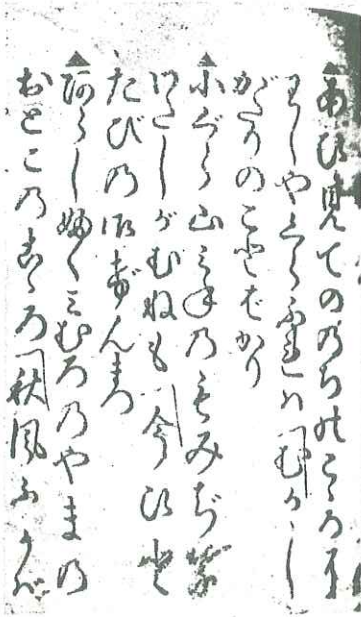
△あひ見てののちのこゝろにわしやくらぶればへむかしがたりのことばかり。

△小ぐら山みねのもみち葉わたしがむねもへ今ひとたびの御げんまつ。

といったもので、唄は小倉百人一首を読み代えて、いささかも下品さがなくて気が利いている。

『江戸読本』第二号より始った、三田村鳶魚翁秘蔵の瓦版の翻刻第一号に京屋宗兵衛板の『豊年福介それそれ』がのつ

それぶし』がのつ

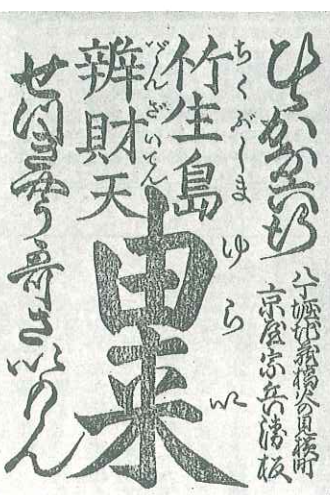


字餘おぐらいたこぶし（『書物の趣味』）

ている。
▲むこも×××娘も×××じゃことしやたんとつけくれの餅それくく
く大りやうまんさくじや
▲あたまかちなる×××もてはかなふ福助にあやかりてそれくそ
れふくくふくがくる



うき世山下八景（『駄住詞』）



竹生島由来（『駄住詞』）



豊年福介それそれぶし（『江戸読本』）

×××は『江戸読本』翻刻の際の伏字で「やむを得ずならなかった」と、編集人の一人、綿谷雪氏の後記にある。

○数年前、太平書屋から刊行された斎田作楽編『駄住詞第一集』に、京屋宗兵衛の瓦版本が二点紹介されている。「ひらかな六行せつやう哥さいもん 辨財天由来」と「浮世山下八景上・下」で、表紙絵を参考図として載せさせて頂く。編者の注によれば、「八丁堀京屋宗兵衛の瓦版小冊子は、寛政・文化頃の板行と考えられ、内容・形式ともに珍重すべきものが多い」とある。

○近時刊行の、廣

瀬ちかさんの労作『共古日記抄』（巻之九）に

「うそくらべ見立評判」一枚

江戸八丁堀火之見横町、京屋宗兵衛

の書目が載っている。

○東屋傳藏

八丁堀地蔵橋近くにあった板元で、

瓦版に類した流行唄などを出版していた。藤田徳太郎氏著『近代歌謡の研究』に、この店の出版物として、「十二ヶ月かつかぶし」「忠臣蔵十一段続き

かつかぶし」「江戸吉原大新版はやり歌かつかぶし」を挙げている。

同書に載せる「十二月かつかぶし」の歌詞というのは、

「胸や羽根突くへイ、カ、うちじや双

六歌がるた

「ワカ嬢さん一人ウしてイ、カ、とっ

ちり

から

りん

カ、

手鞠

やな

んと

つく

やん

れ一

イ二



忠臣蔵十一段続 かつかぶし（『近代歌謡の研究』）

ウ三か、く（藤田氏前掲書、三六五頁）

○松坂屋吉蔵

『天言筆記』巻四（新燕石十種）に、この店で出版した「越後信州地震くどきやんれ節」が載っている。

○本屋嘉兵衛

八丁堀七軒丁の板元で、はやり唄の瓦版を出版している。前掲書『近代歌謡の研究』に収録の図版をみると、「はやり唄だんぼさんふし」「亥ちごだんぼさんくぜりもんく」が知られる。その中の歌詞を一首示すと、

「わたしや青葉のこがるるすすき、いつか野に出てコレみだれたやたんぼさんく、

「だいちのむすめにとのごかない

とのごはあれどもあねごのとのご



はやり唄 だんぼさんぶし
（『近代歌謡の研究』）



急ちごだんぼさん くぜりもんく
（『近代歌謡の研究』）

板本町二丁目家主
王金堂 藤林屋久兵衛
上里春生氏著『江戸書
籍商史』にのる嘉永六年
の「書物問屋」の名簿に
よると、書物問屋「古組
」の中に

板元 八丁堀七間丁
佐倉屋林兵衛
油屋 忠藏

○八丁ホリ「瀧の屋」
この店も瓦本専門の店で詳しいことは明らかでないが、先に紹介した三田村鳧魚翁の「瓦版の流行唄」の翻刻シリーズの中に（『江戸読本』第三巻第

三号）瀧の屋板行の「新はんかり宅や
つちよるぶし」（八丁ホリ、瀧の屋）
が載せてある。
▲色の横はま。アノがんきろう客は
あめりかおろしやいぎりす
ずんべんたらりんとつばくさ南京
おどりヨやつちよるよくくね
▲娘てわざの。ゑだ豆うりを。よん
で麥ゆでつまみぐい
かどづけ新内明がらすすりばち
むけんヨやつちよるよくくね
以下六首あるが、引用するのを略す。
八丁堀地区には、あまり名の通った
板元はないが、吉田英氏の『浮世絵事
典』には、川口屋と和泉屋が載ってい
る。

○川口屋宇兵衛 略称川口と呼ぶ板元。
福川堂と称し、海賊橋通り坂本町一
丁目にあった。文政から嘉永にかけ
などの店があり、
板木屋としては次の職人達が名を留
める。

○神田大明神御祭禮 文化十四九月十五日
板元 八丁堀七間丁
木屋富五郎
近江屋虎吉
三河屋忠平

○和泉屋 八丁堀の大通りにあった地
本問屋。初代広重の団扇絵などを刊
行し、入山形に中の字が家標である。
嘉永再興時の『諸問屋名前帳』を見
ると、八丁堀地区の
地本双紙問屋に

八丁堀水谷町一丁目 松坂屋金之助
嘉永七年四月転宅
北島町松吉店 松坂屋菊次郎
不正之島隠影一件二付江戸私
安政二年九月除名
北島町喜兵衛店 本屋 久助
嘉永五年十一月転宅。小伝馬町三丁目
治兵衛店。隠影一件二付。安政二年九
月転宅。日比谷町、安兵衛店
水谷町二丁目 善藏方問屋 三倉屋惣吉

千代田図書館蒐集の山王祭礼番付中
に、次のような、八丁堀七軒町の板元
の名を刻したものがある。

○山王御祭禮番附 文化九壬申年六月十五日
板元 八丁堀七軒丁
熊次郎
平八
友三郎
惣五郎
清五郎
喜兵衛
井兵衛
金次郎

て出板物がある。山形に上の字が家
標。
嘉永再興時の『諸問屋名前帳』を見
ると、八丁堀地区の
地本双紙問屋に

八丁堀水谷町一丁目 松坂屋金之助
嘉永七年四月転宅
北島町松吉店 松坂屋菊次郎
不正之島隠影一件二付江戸私
安政二年九月除名
北島町喜兵衛店 本屋 久助
嘉永五年十一月転宅。小伝馬町三丁目
治兵衛店。隠影一件二付。安政二年九
月転宅。日比谷町、安兵衛店
水谷町二丁目 善藏方問屋 三倉屋惣吉

八丁堀、北紺屋町、新兵衛店 佐 吉
同 岡崎町、常吉方 元 吉
八丁堀、金六町、源兵衛店 熊次郎
北島町、友七店 平八
南茅場町、陸助店 清五郎
亀島町、藤兵衛店 惣五郎
同 友三郎

板木屋 山王祭礼所前新七店 金次郎
坂本町二丁目吉右エ門店 井兵衛
" 友右エ門店 喜兵衛
" 南茅場町、陸助店 清五郎
" 亀島町、藤兵衛店 惣五郎
" 同 友三郎
" 北島町、友七店 平八
" 八丁堀、金六町、源兵衛店 熊次郎
" 八丁堀、北紺屋町、新兵衛店 佐 吉
" 岡崎町、常吉方 元 吉

八丁堀、北紺屋町、新兵衛店 佐 吉
同 岡崎町、常吉方 元 吉
八丁堀、金六町、源兵衛店 熊次郎
北島町、友七店 平八
南茅場町、陸助店 清五郎
亀島町、藤兵衛店 惣五郎
同 友三郎

板木屋 山王祭礼所前新七店 金次郎
坂本町二丁目吉右エ門店 井兵衛
" 友右エ門店 喜兵衛
" 南茅場町、陸助店 清五郎
" 亀島町、藤兵衛店 惣五郎
" 同 友三郎
" 北島町、友七店 平八
" 八丁堀、金六町、源兵衛店 熊次郎
" 八丁堀、北紺屋町、新兵衛店 佐 吉
" 岡崎町、常吉方 元 吉

板木屋 山王祭礼所前新七店 金次郎
坂本町二丁目吉右エ門店 井兵衛
" 友右エ門店 喜兵衛
" 南茅場町、陸助店 清五郎
" 亀島町、藤兵衛店 惣五郎
" 同 友三郎
" 北島町、友七店 平八
" 八丁堀、金六町、源兵衛店 熊次郎
" 八丁堀、北紺屋町、新兵衛店 佐 吉
" 岡崎町、常吉方 元 吉

板木屋 山王祭礼所前新七店 金次郎
坂本町二丁目吉右エ門店 井兵衛
" 友右エ門店 喜兵衛
" 南茅場町、陸助店 清五郎
" 亀島町、藤兵衛店 惣五郎
" 同 友三郎
" 北島町、友七店 平八
" 八丁堀、金六町、源兵衛店 熊次郎
" 八丁堀、北紺屋町、新兵衛店 佐 吉
" 岡崎町、常吉方 元 吉

頁	年	題名	著者
29	昭55・2・23	江戸の本屋さん 葛屋と須原屋	今田 洋三
28	昭54・11・10	築地居留地散歩	川崎房五郎
27	昭54・6・23	中央区の史跡 その特色	金山 正好
26	昭54・3・10	銀座その3 銀座と文学者たち	巖谷 大四
25	昭53・9・30	銀座その2 「銀座物語」余話	小樽山 俊
24	昭53・6・24	銀座その1 銀座の歴史	野口 孝一
23	昭53・2・25	中央区と錦絵	樋口 弘
22	昭52・10・15	日本橋百話 「日本橋」を編さんして	西山松之助
21	昭52・6・25	京橋・日本橋思い出話2	藤浦富太郎
20	昭52・3・26	京橋・日本橋思い出話1	藤浦富太郎
19	昭51・11・20	京橋・日本橋座談	安藤 菊二
18	昭51・6・26	江戸・東京の地図	喜多川周之
17	昭51・2・21	「水路部」百年	中西 良夫
16	昭50・12・6	築地小田原町界限	加藤 武
15	昭50・6・28	江戸のおまつり	鈴木 理生
14	昭50・2・15	隅田川に関する新説	豊島 寛彰
13	昭49・10・19	洋学とその時代	大久保利謙
12	昭49・5・25	江戸を吟んだ川柳	浜田義一郎
11	昭49・1・19	初春の江戸年中行事	前島 康彦
10	昭48・9・22	江戸図屏風について	萩原 達夫
9	昭48・6・23	漫談 江戸っ子	川崎房五郎
8	昭48・3・31	江戸の市政と町の生活	荒井寅次郎
7	昭47・12・23	広重の浮世絵	鈴木 重三
6	昭47・7・22	佃島の話	佐原 六郎
5	昭47・3・18	両国界限の歴史	野尻 泰彦
4	昭46・11・20	大正時代の日本橋地区	田中 閑水
3	昭46・7・3	明治・大正期の築地周辺	乾 達雄
2	昭46・2・27	江戸時代人の骨相	河越 逸行
1	昭45・11・21	江戸城の防備について	豊島 寛彰

頁	年	題名	著者
30	昭55・6・28	古地図談義 江戸・東京の珍しい地図	岩田 豊樹
31	昭55・10・4	私の魚がし 八代目魚河岸を語る	町山 清
32	昭56・3・7	江戸のたべもの	多田鐵之助
33	昭56・7・25	花火の歴史と両国川開き	南坊 平造
34	昭56・10・3	大正の築地っ子	岸井 良衛
35	昭57・3・13	中央区の建築散歩	山口 廣
36	昭57・7・3	半七捕物帳をたずねて	今井 金吾
37	昭57・10・9	地図で語る中央区 明治期を中心として	師橋 辰夫
38	昭58・2・26	都電八十年の歩み 一九〇三—一九八三	雪廼舎閑人
39	昭58・7・9	銀座ぼやし	永井 保
40	昭58・10・8	築地居留地と明治の教育	手塚 竜磨
41	昭59・3・17	明治の建築 日本橋・銀座界限	初田 享
42	昭59・5・26	生きていた日本橋魚河岸	尾村幸三郎
43	昭59・10・6	大正の銀座と広告会社	瀬田 兼丸
44	昭60・3・23	明治の東京を描いた画家 清親と安治	吉田 漱
45	昭60・6・29	八丁堀組屋敷と与力同心の住まい	中村 静夫
46	昭60・10・12	雑学「東京行進曲」 歌謡にみる昭和初期東京世相史	西沢 爽
47	昭61・3・1	江戸の火消制度	池上 彰彦
48	昭61・5・24	江戸みこし談義	林 順信
49	昭61・10・18	文明開化と洋食文化	小菅 桂子

◆東京を語る会 第50回記念講演

日時 一月一七日(土) 午後二時から
 演題 ぼくの見た東京
 講師 吉本 隆明氏(詩人、評論家)
 大正13 月島で生れる
 四、五歳の頃、佃島に移る(昭和
 16 葛飾へ移るまで佃島に住む)
 昭和6 佃島小学校入学

「言語にとって美とはなにか」『共
 同幻想論』『マス・イメージ論』など
 多数の著作で知られる吉本氏により、
 どんな東京が語られますか。多数のご
 参加お待ちしております。

昭和39頃 詩「佃渡しで」